
ありがちな設定のありがちな話 ～リリカルなのはStrikerS～

スキアヴォーナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ありがちな設定のありがちな話　　＼リリカルなのはStrike
rs＼

【Nコード】

N8137Y

【作者名】

スキアヴォーナ

【あらすじ】

目的の違う5人の人物が、1人の女性の下へと集う。各々の目的を果たす為に。そして彼らと出会う機動六課をはじめとする管理局の魔導師達…そんな感じのリリカルなのはの二次創作です。

プロローグ（前書き）

この小説は、魔法少女リリカルなのはStrikersの二次創作です。

。オリキャラが多数登場します。

（プロローグで全員顔出しはさせますが）

。設定がベツタベタかつ、中二臭い要素あります。

。作者はどちらかというとレジラス擁護のアンチ六課気味です

かといって、理不尽な設定・キャラ改变、メアリー・スーの予定は無いです。

。オリキャラは強設定ですが、俺TUEEEEの要素の予定も無いです。

六課と拮抗するくらいの実力のつもりで進めていきます。

。更新速度はかなり不定期になると思われます。

。作者の文才はかなり低いです。でもそれを言い訳にするつもりはありません

誤字脱字の報告、設定の矛盾、要望、意見などありましたらどんどん下さい。

ただ、ガラスのハートですので、あまりにも理不尽な感想はやめてください。

（具体的な指摘も無しに、ヘタクソだの書くのやめるとかの感想を書くとか）

以上のことを踏まえた上で、お読みください。

プロローグ

・新暦66年、第18管理世界のとある都市の市街にて

「…ちくしょう」

暗闇の中、月明かりが1人の少年を照らしている。

黒い髪、黒い瞳のその少年は、着ている白いパーカーのポケットに両手を突っ込んでいる。

その表情に浮かんでいるのはあからさまな怒り。

それも、やり場のない理不尽な怒りに震えているものであった。

「…ちくしょう…！」

歯を食いしばったまま、少年は再び呟く

少年がいる路地裏には、彼以外の人間はいない。

他にいるのは散らばっている生ゴミをつつく、数羽のカラスぐらいである。

「…ちくしょう…！」

少年は、今度は声を張り上げて叫び、近くにあったゴミ箱を思い切り蹴飛ばす。

その音に驚いたカラス達は、月が浮かぶ夜空へと舞い上がる。

「何でだ…！何でなんだよッ…！！」

拳を握りしめながら俯き、少年・タツマ・ノダは絞りだすような声でまた呟く。

こんなことをしていても何にもならない。それは少年自身がよくわかっていた。

だが、かといって自分がこれからどうすればいいのかさえわからないのだ。

「父さん…母さん…サヤカ…」

数年前まで一緒だった。みんなで笑って幸せな日々を過ごしていたが…それが5年前、脆くも崩れ去った。

自分以外の家族が皆殺しにされた。生き残ったのはタツマ一人だけだった。

家族を殺した奴らへの復讐、その為だけにタツマは管理局員になった。

彼の両親も魔導師だった。故に彼の自身にも魔法の素質は宿っていた。

管理局でメキメキと腕を上げていく中、タツマは家族を殺した連中が何者なのかを知った。

そいつらを捕まえて法の裁きを受けさせる。それがタツマの絶対の目標だった。

…しかし、1年前にそれは決して叶うことのない目標へと変わってしまった。

そのあまりにも理不尽な結果に、タツマは怒り狂った。

だが、一局員でしかないタツマの我儘が通る筈もなかった。

そしてやり場のない怒りを抱えたまま、タツマは管理局を辞めた。

そして、今は自分の故郷である世界で、空虚な日々を過ごしていた。自分がどうすればいいかわからない、家族の敵すらとれない。

いや、それを行おうとすれば自分が悪者になる、そんな状況であっ

ただ。

「クソツ…クソツ…クソツ!!!」

怒りに任せるまま、タツマは辺り一面に広がるゴミを蹴り散らかす。自分一人では何もできない。そんな自分の無力をさひたすらに呪いながら。

「…いい年こいた男が、なーにをやってるんだか」

ふと、自分以外誰もいない路地裏に気怠そうな声が響き渡る。タツマはその声のした方へと振り向く。

「なあ？アンタはそんなことをしてるだけで満足なのかい？」

そこにいたのは、ボサボサのオレンジ色の髪で、顔に多数のそばかすがある

白衣を纏った眼鏡の女性であった。

「…なにが言いたい」

不快な感情を隠そうともせず、タツマは女性に向かって言い放つ。心の奥底では、憂さ晴らしにコイツを痛ぶってやろうかとさえ考えていた。

「アンタの目を見りゃわかるさ。自分一人じゃどうしようもなく迷っているガキ…」

アンタの顔は正にそれだからね」

「…!!…言わせておけば…このババア!!」

しかし女性は、飄々とした態度で、タツマに向かって言葉を放つ。
タツマはその言葉に更なる怒りを覚え、反射的に女性に向かって殴りかかる。

「そうやってすぐ真に受けて暴力…ガキそのものじゃないか…っ
！」

「!?!」

だが、タツマの放った拳は女性に当たることなく空振りする。
瞬時に体を横に捻ったまま、女性はタツマに足払いをかける。

「がッ…!」

タツマはすぐに体の自由を失い、わけのわからぬまま俯せに倒れ込む。

女性はすかさず倒れたタツマの上にのしかかり、彼の両腕を捻り上げた。

「…けどさ、アタイはそういう奴は嫌いじゃないぜ?」

タツマに乗ったまま、女性は何故か笑顔のまま更にこう続けた。

「アタイと一緒に来れば、アンタのやりたい事も出来るかもな?」

*

・新暦69年、第14管理世界、とある研究所にて。

「…データ抽出完了。実験段階は次のステージへと進めます」

「ご苦労、検体にスリープ処理を施せ、今日はここまでだ」

数人の研究員が報告書片手に報告を行い、それを聞いた主任が指示を出す。

管理局に知られることのない違法な研究施設。

そこで彼らは「ある」対象物をひたすらに研究していた。

「睡眠装置起動、タイプ・ダブルゼロ、スリープモードへの移行を開始します」

研究員はポッドの前でパネルを操作していく。

そのポッドの中にいるのは、白い検体衣に身を包み

多数のチューブによって繋がれた青髪の少年であった。

少年は人形のようにピクリとも表情を変えことなく、ただひたすらに前だけを見ていた。

「この実験が進めば我が研究所の技術も飛躍的に上がる。そうすれば…」

「ああ…忌々しい管理局の連中をねじ伏せ、独立することも夢ではない」

ポッドの少年を見つめながら、研究員と主任が下品な笑みを浮かべる。

管理局によって、今までの研究成果の殆どが違法認定される中
ある管理外世界で見つけたのが、その少年であった。

研究者達は、自分の満足いくデータを取る為に

少年に対して数々の非人道的な実験を繰り返してきていた。

そのことに対して彼らは心を痛めることは全くない。

自分達が拾ってきた研究材料に、何をしようがお構いなしという心持ちであつた。

「……………」

少年は何も感じていない。いや、考えることすら放棄していた。

ここに来る前の自分の過去は何も思い出せない。

脳裏に過るのは、過酷な実験の日々だけである。

自分がなぜこのような体になってしまったのか、自分がどうしてこ
うなったのか

そんなことが全くわからないでいたのだ。

やがて思い至つたのは考えるだけ無駄だということ。

自分はこの研究施設で、彼らの道具として使い続けられ、やがて死
ぬ。

そう思い、何もかもをあきらめていたのだ。

しかしこの日、そんな少年の考えが改まることになる。

「?…異常事態だと?…侵入者…なっ…!」

研究員の一人が突如、異変を感じてモニターを覗き込む。

見ると、自分達のいる研究室に向かって、凄まじい勢いで移動して
いる人物がいた。

「何事だ!」

「侵入者です!このメインラボに一直線に…ぐああ!!」

主任が慌てて立ち上がり、それに研究員の一人が答えようとするが
次の瞬間、研究員は血飛沫を巻き散らして床へと倒れ込む。

「えーっと…おおっと、ここでいいみたいだな」

その背後に立っていたのは、和服のようなバリアジャケットを纏い二振りの日本刀型デバイスを手にした黒髪の少年であった。

「な、なな…何者だ…！」

「ああ、悪いけど説明すんの面倒くさいからさ」

恐怖でガクガクと震える主任に対して、抑揚のない声で少年は答える。

次の瞬間、主任の眼前に映ったのは、ギラリと光る日本刀の刃であった。

「さーてと、こいつをこうやってと…」

数分後、研究所のメインラボに立っていたのは少年一人だけであった。

血の海の中で少年は、楽しげな雰囲気で淡々と、ポッドの前で操作を続けていた。

「これをポチっと…おお動いた動いた！」

少年は最後に赤いボタンを押す。

すると、ポッドの中にいる少年を繋いだチューブが次々と外されていき

ポッドの外壁が上へと上昇していく。

「……？」

ポッドの中にいた青髪の少年は、無表情ながらも戸惑いを浮かべていた。

自分を解放した目の前の少年は何者なのか？何故今になってこんな事が起こっているのか？

「いやゝしつかしこういうのって何かスゲえよな！

全身機械のサイボーグ、機人のプロトタイプ！これこそロマンって感じでさあ」

黒髪の少年はお構いなしに目をキラキラさせながらそんなこと言っている。

この場の状況に、あまりに似合わない極めて不自然な内容である。青髪の少年の方に見れば、まるで意味不明な状況であった。

『くだらんお喋りをしてないでさっさと連れて帰ってこい。タツマ』
「ああつとワリいワリい。すぐ戻るからさ」

ふと、黒髪の少年・タツマのデバイスから通信音声が発せられる。その声の主に対して、片手を挙げて軽いノリでタツマは謝る。そして、その後に青髪の少年へと手を差し伸べた。

「助けに来たんだ、俺と一緒に来ないか？楽しく生きようぜ？」

- 新暦70年、第6管理世界、アルザスの地・ル・ルシエの里にて
里の関係者以外誰も知る筈のない辺境の洞窟、その中を一人の男が進んでいた。

男は肩まで伸びる銀色のロングヘア、真紅に染まったその両目は敵対した人間を睨むだけで戦意を喪失させるような、そんな凄みを醸し出していた。

また、目だけでなく、全身からもどこか、近寄りがたいオーラを発している。

男がそんな禍々しい雰囲気を纏うに至っているのは彼の出自が原因である。

男は生まれた時から戦場の最中にいた。物心ついた時から武器を手にして戦っていた。

自分達弱い民を迫害する国家。それに対抗するレジスタンスとして男は戦っていた。

そして男の姉は、レジスタンスのリーダーでもあった。

男は姉から生き残る為の術として、戦いを教わっていた。

しかし、そんな自分の境遇を恨んだことなど一度もない。

自分を愛し、自分の為に戦っていた姉の事を、男もまた尊敬し、愛していた。

だが、国家とレジスタンスの戦いは、管理局の介入という形で一方的に戦局が傾いていく。

管理世界でもあり、管理局との繋がりも深かった国の政府は

管理局本局へと応援を要請し、その圧倒的な力でレジスタンスを蹂躪した。

そして…レジスタンスのリーダーであった男の姉は管理局の介入に怖気づいた、レジスタンスの幹部達の、自己保身の道具として売られたのだ。

責任の全てを押し付けられた彼女は、大勢の国民の前で大々的に処刑された。

その時の光景を、男は今でも鮮明に覚えている。

剣が振り下ろされ、姉の体からその首が離れた瞬間、男は誓った。必ず姉の敵を取る。その為に力を蓄える。自分達を見捨てたこの国を消す為に、と。

男はそうして裏の世界へと消え、そして数年前にある女性と出会った。

そして、利害関係の一致からその女性の下へと身を置き今はこうして、女性の頼みでこの辺境の地へと赴いているのだ。

「…ここだな」

男は洞窟の最奥部、巨大な扉の前へと立つ。

そして、手にした銃型のデバイスに魔力を込め、魔力弾を形成する。

「…消す」

収束された魔力弾が、扉に向かって一直線に飛んでいき、爆発を起こす。

爆風の晴れた先には、巨大な穴の開いた扉がある。

男はデバイスをしまうと、その扉の先へと進んでいった。

「こいつか…」

男がポツリと呟く。扉の先にあったのは、蝋燭の光で照らされた、薄暗い一つの牢獄。

その中にいるのは薄汚い布きれを身に纏った、金髪のくりつとした目をした小さな少女。

その少女に抱えられている、黒竜の雛であった。

「にいちちゃん、だあれ？」

少女は入ってきた男を見るなり、キョトンとした表情でそう尋ねる。

「あ、あたしクラム、クラム・ル・ルシエって言うの！にいちちゃんの名前はなあに？」

尋ねてもいないのに少女・クラムは自己紹介をする。男は黙って少女を睨んでいるだけだ。

普通の子供なら、それだけで恐怖のあまり逃げ出すのが普通だったのだが

「でね、この子の名前がエリザベートっていうの！可愛いでしょ！」

クラムはそういつて笑顔を浮かべて、自分の手の中で眠る竜の紹介まで始める。

「ねーねー聞いてよにいちちゃん。あたしねえ、このエリーの為にお

友達を描いてあげたんだよ？

そしたらエリーもすごい喜んでくれたのにさあ

それを見た里のおじいちゃんやおばあちゃん達にエリーの友達とられちゃったの

そしたらあたしとエリーをこんな所に閉じ込めたりしたんだよ！

ねえ、なんでかなあ？あたしはエリーにお友達を作ってあげただけなのに…」

「…黙れ、消すぞ」

反応のない男に対し、自分の身の上話まで始めるクラム。

その態度に少タイラついた男は、デバイスの銃を取り出し、クラムに向ける。

「ほえ〜それカッコいいね！ねえねえ、それは何ていうおもちゃなの？」

ところが、そんな脅しもなんのその、クラムは鉄格子の前までテクテク歩いていき

興味津々な表情で、男の持つデバイスを見上げている。

「…おいエスティ…本当にこのガキで間違いないのか？」

『一応はな、データの年齢や外見とも一致している』

頭の痛くなってきた男は、たまらず協力者である女性と通信を取る。話の通りとはいえ、ここまで常識外れな少女が目標だとは思っていなかったからだ。

『とにかくアンタの目的はそいつの確保だ、なるべく手短に頼むさね』

「…チツ」

内心で若干の忌々しさを感じつつも、男はクラムの幽閉されている牢獄へと近づいく。

「…ねえ、にいちちゃん。はやくにいちちゃんの名前を教えてよ」

が、男の心境も知らずにクラムはぷくーっと顔を膨らませる。

男は手にしたデバイスの銃に魔力刃を形成し、それによって牢獄を破壊しながら口を開いた。

「…ラフェスト…ラフェスト・デュアリスだ」

*

- 新暦72年、第58管理世界、管理局支部の建物内にて。

管理局員の制服を身に纏った女性が、会議場へと向かっていた。

しかし女性は管理局員ではない。今日の会議に集まる管理局の幹部を殺すために

局員に扮して、この場所に潜入しているのである。

「…これから始まるのね、私の戦いが」

腰まで届く燃えるような赤いロングヘアの女性・パレットは、胸に手を当ててポツリと呟く。

- どうしてよ！なんで×××が連れていかれなきゃいけないのよ！

- パパもママも何か言っつてよ！どうして何もしないのよ！

- 返してよ…！私の弟を返してよー！！

目を閉じれば、いつでも鮮明に思い出すことのできるあの日の記憶。自分の家族を引き裂いた、人生で最悪の出来事が起こったあの日。何もしなかった愚かな父と母はとうの昔に見限っている。

そして、自分の助けたかった、たった一人の人間が、今どこで何をしているのかも知っている。

しかし、パレットはまだ、その人物と会うつつもりはなかった。

必至に抵抗したとはいえ、自分の両親と同じように何も出来なかったあの日の自分が許せないのだ。

そのけじめをつけるまで、あの子と会うわけにはいかない。そう心に決めていた。

そして長い間独学で力を身につけ、こうして、家族を引き裂いた連中のいる場所へと来ている。

全てに片を付け、例えば血塗られた両腕であったとしても、自分の中でけじめをつけた上で、あの子を抱きしめて、そして謝ろう。

あの日守ることが出来なくてごめん、と。

そんな思いを胸に、パレットは会議室の前まで来て、扉をノックす

る。

「……？……おかしいわね……」

だが、中から反応は返ってこない。手筈通りなら局員から中に入るように言われ

その隙について中の人間を全員殺す手筈であつた筈なのだ。

「返事がないわ……どうなってるの……？」

妙な胸騒ぎを感じつつも、パレットはゆっくりと扉を開ける。

「……これは……！」

その次に視界に入ってきた光景は、あまりにも予想外の物であつた。殺す筈だつた局員たちが、全員後頭部から大量の血を出しながら突っ伏していたのだ。

パレットは動揺を隠せないまま、部屋の中を見渡す。

「あれ？まいったなあ……こんな所見られちまうとは……」
「……………」

次にパレットの目に映つたのは、血塗られた日本刀型デバイスを持ち、困つたように呟くタツマと
水色のロングコートと長いマフラーを纏つた青髪の少年であつた。

・新暦75年、ミッドチルダ南部、アルトセイム地方のある屋敷

「おっはよー!!」

屋敷の食堂に入ってきたのは、ハイテンションに片手を上げて挨拶をするタツマである。

「もう…遅いわよタツマ、他のみんなはもう食べ終わってるわよ」

「いや、ワリいワリい…徹夜でゲームしてたら寝坊しちまってさあ」

それに答えるのはテーブルの片づけをしていたパレットである。

タツマはパレットに対して、軽いノリで謝罪をする。

「朝っぱらからうるさい奴だ…」

それに対して反応を示すのは、テーブルでデバイスの整備をしていたラフェストだ。

「なんだよラフェスト…お前は相変わらず暗いな」

「黙れ、貴様の様に無駄なことはしない主義なだけだ」

「無駄じゃね〜ぜ? こないだ発売した新作ゲームが楽しくってさあ
お前もちつとはそういう趣味見つけたらどーよ? でないと人生楽しく
生きられないぜ?」

「うるさい…消すぞ」

タツマのハイテンションな会話にイラつき、ラフェストは整備していたデバイスを向ける。

そんな光景を目にして、パレットはまたかといった感じの表情で溜

息を吐いていた。

「タツマにいちゃんもラフェストにいちゃんも、喧嘩はだめだよ」

そんな二人の間に割って入るのがクラムと、彼女の肩に乗る黒竜、エリザベートである。

クラムは両手をバタバタさせながら、二人を交互に見つめていた。

「大丈夫だってクラム、にいちゃん達は喧嘩なんてしてないよ」

「ほえ？ そうなの？」

「うんうん、そうだよ」

タツマはにんまりと笑いながらしゃがみ込み、クラムの頭を撫でてやる。

クラムはキョトンとしながらも、されるがままに気もち良さそうにしていた。

「…チツ」

一方のラフェストは舌打ちをした後、再びデバイスの整備に没頭する。

「……………」

そしてラフェストの隣に座る青髪の少年・オスカーは無言のままその光景を見ていた。

タツマはそのオスカーの隣へと座り、冷め始めていたトーストにかぶりつく。

「よお、起きてるかお前ら」

と、その段になって食堂に、白衣を纏ったオレンジ髪のそばかすの女性が姿を現す。

「おふ、おふあようえふてい（おう、おはようエステイ）」

「おはようございますエステイさん」

「おはようなのエステイおばさん!!」

タツマ、パレット、クラムの三人が女性・エステイ・トゥデイに対して挨拶をする。

（タツマは口にトーストを頬張ったままであったが）

ラフェストは無反応、オスカーは無言のまま顔を少し下げた。

それぞれの反応を見た後、エステイは一番奥の席へと座り、そして話を始める。

「ほんじゃ、今日のアタイらの仕事についてなんだが…」

*

それぞれ目的の違うイレギュラー達…

新暦75年、彼らの集うミッドチルダにて、正史とは異なる物語が始まろうとしていた。

オリジナルキャラ紹介（小説更新共に随時更新）

タツマ・ノダ：21歳・男性

デバイス：日輪、月輪（和服のようなバリアジャケットと二振りの日本刀型のデバイス）

黒髪で黒い瞳、過去に、何者かによって両親と妹を殺されている。

オスカー：17歳・男性

デバイス：プロトナックル、フリーズキャリバー（ライトブルーのロングコートと

マフラーのバリアジャケット。）

青髪で無口な少年、ある研究施設に捕らわれていた、タイプ・ダブルゼロと呼ばれる戦闘機人

ラフェスト・デュアリス：21歳・男性

デバイス：パラベラム（銃型のデバイス）

銀色のロングヘアーに真紅の瞳

ある管理世界のレジスタンスとして戦っていたが、管理局に姉を殺される。

以来、世界への復讐の為に力を蓄えている。

パレット：18歳・女性

デバイス：ペルデルス（槍型のデバイス）

腰まで届く赤いロングヘアーの女性。

ある人物と再会する為に、自分の中ではじめをつける為の戦いをしている。

クラム・ル・ルシエ：8歳・女性

デバイス：フンケルン（ブーストデバイス、詳細不明）

金髪のくりつとした目の少女。エリザベートという黒竜を使役している。

ある理由で、里の者たちによって幽閉されていた。

エリザベート：雌

クラムが使役している青眼の黒竜。愛称エリー。普段は彼女の肩に乗れる程度のサイズだが

大の大人を頭から噛み千切れるくらいまで巨大化出来る。

エステイ・トウデイ：48歳・女性

ボサボサのオレンジの髪、そばかす、眼鏡、白衣を纏った女性。

上記5人を束ねていること以外、現時点での詳しいプロフィールは不明。

第1話：目的、新設部隊

第38無人世界、人が全く存在しない無人の世界の密林。

「ハア…ハア…ゼエツ…!!」

その中を、1人の男がケースを抱えながら必死に駆けている。
自分の命を刈り取ろうとする者から逃げるために。

「ちくしょう…何なんだよアイツらは…!!」

呼吸も荒く、若干涙目になりながら必死に走る。

男はロストログアを転売しながら生計を立てている、云わば裏の人間であった。

今日もまたいつものように獲物を発見し、それを手にしようとしたその時、

突如として現れた二人組によって襲撃され、殺されそうになったところを

上手く隙をついて、こうして必死に逃げ惑っているのだ。

転送用に使った、自分の持つ小型の次元航行船、そこまで辿り着く為に。

「おい、鬼ごっこはおしまいだぜオッサン」

「な…ヒイ!!」

が、辿り着く遙か前に、自分の命を狙う死神がいつの間にか、自分の前に立っていた。

男は情けない声をあげて、その場に倒れ込んでしまう。

「さつきは悪かったって…それ渡してくれれば見逃してやるからさ…な？」

二人組のうちの一人、タツマは場の雰囲気似合わない、明るい表情を浮かべている。

その隣に立っているオスカーは、相変わらずの無表情で沈黙を保っていた。

「ふ、ふざけんな！こいつは俺の久々の獲物なんだ！」

だが、命の危険とわかっていても、男は獲物を横取りされたくない一心で、そんなことを言ってしまう。

その反応を見たタツマは、やれやれと言った感じに首を振り、待機中の己のデバイスを取り出す。

「行くぜ、日輪、月輪」

次の瞬間、タツマは光に包まれ、和服風のバリアジャケットを纏い二振りの日本刀型デバイス・日輪と月輪がちりんを手を持っていた。

「…フリーズキャリバー、起動…」

それに合わせるようにオスカーも自分のデバイスを起動。

ライトブルーを基調にしたロングコートとマフラーのバリアジャケットに加え

右腕にアームドデバイス・プロトナックルと

両足にローラースケート型のデバイス・フリーズキャリバーを装着する。

「うわあああ！！！！」

その変貌に驚いた男は、再び悲鳴を上げてその場から逃げようとするも

「グヘッ!!」

「……………」

立ち上がるうとした瞬間、足を取られて盛大にスっ転んでしまう。見ると、オスカーの立つ位置から男の立つ地面にかけてが、一直線に氷結していた。

「…ナックルダスター」

オスカーは足下に水色のベルカ式魔法陣を展開
右腕を振り上げて、プロトナックルを高速回転させる。

「…ヒット」

次の瞬間、弾丸のような速さで突撃したオスカーは
すれ違い様に、倒れた男の顎に向かって、右手のナックルでアップ
ーをかける。

その膨大な破壊力によって、男は一瞬で意識を刈り取られ、上空高
くへと舞い上がる。

その更に上空で、両手のデバイスを構えたタツマが待機していた。

「おりゃー!!! 剣技・三日月斬!!!」

左手に持った月輪を振り上げ、やたらと稚拙な感じの漂う技名と共に
男に向かって急降下しながら、月輪を思い切り振り下ろす。

男は胴体に刻まれた三日月型の傷から血飛沫をあげながら、地面へと逆効果して激突した。

そして二人は、倒れた男のことなど目もくれずに、男の持っていたケースを拾い上げる。

「な、な、オスカーどうだったよ？俺の三日月斬は？」

昨日読んだ漫画のキャラの技を真似てみたんだけどさあ」

「…目標物回収…帰還しよう、タツマ」

「おーい？無視しないでくれー微妙に傷つくよー」

途中、タツマは嬉々としながら、自分の新技の感想を尋ねるもオスカーは回収したケースを手にしながら、淡々と語るのみであった。

予想していたとはいえ、タツマは少し凹んでしまう。

「しかし、エスティは今度は何の研究をするつもりなのかねえ…」

期待の反応を返してくれなかったオスカーは一旦置いておき

タツマは今回の目標物であるケース・レリックをまじまじと見ながらそう呟いた。

第82管理外世界、管理局が関知している世界の中でも一際治安の悪い世界。

「いたか!？」

「いやいない…あの野郎…組織の金盗んでどこいきやがった…!」
そんな世界のとあるスラム街の一角に、数人のチンピラが集まっていた。

チンピラ達のグループは、そのスラム街の中でも群を抜いて大きくその保有する財力も、管理局通貨で換算しても、かなりの量を誇っていた。

しかし、その財力の基である金塊の山が、根こそぎ奪われてしまったのである。

チンピラ達は犯人を必死に探し回っていたが、なかなかどうしてこれが見つからない。

だが、組織の金を盗まれたとあっては、チンピラ達も必死であった。

ピシュン!!

「グア!」

が、刹那、何か鋭い音がしたかと思うと、チンピラの一人が頭から

血を吹きだして倒れる。

「……オイ！」

「撃たれただと！」

「近くにいてることだな……どこにいやがる……！」

それが犯人の攻撃によるものと察知したチンピラ達は、辺りを警戒し始める。

その数秒後、黒いロングコートを纏った銀髪の男が姿を現す。

「デメエ……！」

男の姿を見たチンピラ達は、ナイフやら拳銃やらを手に、一斉に男に向かって襲い掛かる。

男・ラフェストはさして慌てる様子も無く、自分の相棒であるデバイスを取り出す。

「行くぞ、パラベラム」

相棒の名前を呼ぶのと同時に、左足を軸に180°回転
同時に銃型デバイス・パラベラムから魔力弾を発射し、背後にいたチンピラの頭を撃ち抜く。

「消す」

今度はデバイスのモードを変更、両手を大きく広げて銃を構えて
四方にいた4人のチンピラの、左胸を正確に撃ち抜く。

「消す」

更に右足を軸に上へと飛び上がり、両手を前に構えて魔力弾を発射。残っていたチンピラ達の急所を、一発で撃ち抜いていく。

「な…………あ…………」

その間わずか数秒足らず、凄まじいまでの早業である。

最後に残ったチンピラは、何が何だかわからぬまま、呆然と立ち尽くす。

「消す」

抑揚の全くない声で呟いた後、ラフェストは最後の獲物に対しても、容赦なく引き金を引いた。

死体の山の真ん中に立ちつくし、ラフェストはデバイスを待機モードへ移行させる。

彼らの戦いは二種類、各々の目的に直結するものと、エステイ個人の依頼があった。

今回のラフェストの場合は後者であり、自分達組織の資金の調達の為に

管理外世界の裕福なチンピラから金を頂くという

ラフェストからしてみれば、実にくだらない戦いであった。

「チツ…あのババアめ…協力関係とはいえ俺をこんなことに使いやがって…
こつという任務は、あの単純バカに任せればいいものを…」
自分にとって不本意な任務であつたため、ラフェストはイラつきながら一人愚痴っていた。

*

第91管理外世界、そこに存在する非合法の研究施設にて

「た、助け…「アックア・パロトラ」ぎゃあああ！！！」

研究員の一人が、高速で放たれた水の弾丸に体を貫かれる。

その背後に立っていたのは、自分の背丈ほどもある

大型の槍型デバイス―ペルデルスを構えたパレット。

身に纏うバリアジャケットは、簡素な作りの、赤を基調とした鎧のような物である。

「な、何者なんだ貴様は！い、一体何が目的だ！？」

別の研究員が恐怖に打ち震えながら、必死に声を振り出して叫ぶ。

管理局にさえ知られていない、非合法の研究所

そこを突如襲撃してきたのが、目の前にいるこのパレットである。

彼女は研究所内にいた、僅か4名程の研究員を、無言のまま次々と惨殺していったのだ。

ただ一人残った研究員は、わけがわからず混乱するばかり目の前のこの女に、自分達が殺される理由が全く見いだせなかったのだ。

「新暦68年…プロジェクト……」

と、その段になって、パレットが研究員に向かってぼそぼそ何かを呟く。

それを聞き取った研究員はハツとして、ある一つの答えへとたどり着いた。

「その髪の色…まさか…お前はあの検体の…」

研究員がそう呟いた瞬間、冷酷な表情を浮かべてパレットは手にした槍を振り上げる。

「うわああああ!!!!」

恐怖に駆られた研究員は、反射的に後ろに振り向いて慌てて駆け出す。

そして窓ガラスを突き破って、研究所の外へと出た。

だが、研究員を待ち構えていたのは更なる絶望であった。
「グルルルル……」

「…………へ…？」

研究員の目の前にいたのは、青く鋭く光る両目を持った巨大な黒色のドラゴン。

この場にいるはずのない生物を目にして、研究員は頭が真っ白になり、呆然としてしまう。

次の瞬間、研究員の視界が真っ黒に染まる。

そして数秒後、研究員の首から上は、胴体から丸々消えてしまっていた。

「もう、ダメだよエリー！そんなの食べたらお腹壊すよ！」

「キーン……」

研究員を捕食したエリーに対し、そのすぐ近くにいたクラムが人差し指を立てて、彼女に怒る。

因みに両腕には彼女のデバイスであるブーストデバイス・フンケルンが装着されている。

それに対しエリーは、先程までの強暴そうな表情とは打って変わってしょんぼりした表情になる。

「エリーが仕留めてくれたのね」

その様子を遠目に見ていたパレットが、デバイスを片手に一人と一匹の方へと歩み寄ってくる。

「ごめんねパレットねえちゃん…ねえちゃんの目標だったのにエリ
ーが勝手に…」

パレットの姿を見て、今度はクラムがしょんぼりとしてしまう。
そんな彼女に対し、パレットはにっこり笑ってこう答える。

「大丈夫よ、寧ろありがとう。目標が逃げる前に仕留めてくれて」
「…ほえ？パレットねえちゃん、怒ってないの？」
「ええ、怒ってないわ」

パレットの言葉を聞いて、クラムは沈んでいた表情をぱあっと明る
くさせ、ぴよんぴよん飛び跳ねる。

その様子が可愛らしくて、パレットも自然に笑顔になる。

今回のパレットの戦いは前者、即ち自分の目的の為である。
そこに、たまたま手の空いていたクラムとエリーが同行していた。
エステイの得た情報から、この世界に自分の追う敵の何人かがいる
と聞いて

こうしてやってきていたのだった。

（これで計12人…けど全員殺すまで私のけじめはつかない…
あの子に…面と向かって謝る為にも…）

心の中で呟きながら、パレットは胸に下げていたペンダントを手
取る。

その中にある写真に写っているのは幼い頃のパレットともう一人
彼女よりも一回り小さい、赤色の短髪の少年であった。

＊

ミッド南部、アルセイム地方の屋敷

「機動六課ねえ…」

5人がそれぞれの任務に赴いている中
エステイは自室のソファに腰かけ、頬杖をつきながら、
目の前のモニターに映る情報に目を通していた。

調べているのは管理局の新設部隊について。

Lost Property Riot Force 6 古代遺
物管理部機動六課。

名前の通り古代遺物、即ちロストロギア関連の事件の解決を主とする、

50人弱のメンバーで構成された、試験的な部隊だ。

しかし、エステイはこの部隊のことを、どうも胡散臭く感じていた。

「ロストロギア相手とはいえ…ここまでの戦力があるものなのかねえ…」

目を細めながら、もう一度構成員のリストへと目を向ける。

部隊長であり、歩くロストロギアとも呼ばれる、SSランクの魔導師、八神はやてを筆頭に

航空戦技教導隊所属の、誰もが知るエースオブエース、高町なのは

一等空尉

上記の一等空尉と関係が深く、これまたエース級の實力者、フェイト・T・ハラウン執務官

本局航空隊1312部隊所属のヴィータ三等空尉に、首都航空隊所属のシグナム二等空尉

隊長格全員が、管理局というエース級、AAAランク以上の實力の保持者であつた。

この5人だけでも、お釣りが来そうな過剰戦力なのだが。

その他の構成員も、前線、管制共に、将来有望なエリートで固められている。

客観的に見れば、過剰を通り越していじめに等しい戦力の部隊なのである。

（おまけに…）

目を更に細めて、今度は新人メンバーの名前の方へと視線を移す。

陸士108部隊隊長、ゲンヤの娘であるスバル・ナカジマ

首都航空隊のエリート空士、ティータの妹であるティアナ・ランスター

10歳という年齢でありながら、既にBランクの實力者であるエリオ・モンディアル

竜召喚という、希少なスキルを持つキャロ・ル・ルシエ

隊長陣と比べれば見劣りするとはいえ、

その全てが、立派に前線で戦えるだけの實力を持つメンバーだと言える。

しかし、エスティにとっての懸念事項は他にあつた。

「何の因果か知らないが…ウチの連中とはち会わせたくない奴らばかりだねえ…」

困ったもんだよホントに…」

ガリガリと頭を引つ掻きながらエステイは愚痴る。

自分が拾い、ある意味自分が育ててきたともいえる5人の魔導師達。その全員が、この機動六課のメンバーと、大なり小なり関わりがあるのだ。

建前上は協力者でしかないとはいえ

今の自分にとって、5人が貴重な戦力であるのもまた事実。

今後の自分の活動に、大きな支障が出そうな事は、エステイにとっては悩みの種である。

「しかも…バックにいるのがこいつらとくるか…」

ため息を一つ吐きながら、モニターを操作して別の画面を映し出す。

ロストロギアを扱うのが主とはいえ、ここまでの過剰戦力が揃った部隊の新設など

常識的に考えれば、不可能に決まっていることくらい誰でもわかるが、部隊が規格外であれば、その背後にいるのもまた、規格外の間ばかりであった。

後見人とされるのは、本局の重鎮の一人である、リンディ・ハラオウン総務統括官

その息子である、これまた本局エリート、クロノ・ハラオウン提督。

そして、確定情報ではないのだが、上記二人の後見人に加え、かの有名な、伝説の三提督までもが関わっているという情報があるのだ。

膨大な数の次元世界を束ねている、時空管理局本局。

その実質的なトップ達関わっているとなれば、

このような無茶がまかり通っているのも、ある程度理解はできる。

それを踏まえた上で、エステイは、顎に手を当て考え込む。

（ここまでの過剰戦力に、三提督…何か裏があるのは当然だね…）

では、そこまでの地盤を固めてまで、このような部隊を作った理由は何なのか？

少し頭のいい人間なら、単にロストログア取締りの強化が目的の部隊なんていう、単純な考えには至らないのはある種の必然である。

そのような人間の一人であったエステイもまた、

この機動六課には、何か別の大きな目的で、動いているであろう事を見抜いていた。

「…まあ、現段階じゃあ確実な情報が少ないのも確かだわな」

そう言つてエステイはモニターの電源を切ると、ソファアを半回転させる。

日の光が差し込む巨大な装飾窓、その先に映る美しい草原。

自分たちのような裏の人間が隠れ住むには、酷く不釣り合いなことは、エステイも承知していた。

「レジイの奴が知つたら、また頭を抱えるだろうねえ…」

ケラケラと笑いながら、かつての友人の一人である人物の顔を思い浮かべる。

本局を忌み嫌っている彼にとっては、このような過剰部隊の新設など

頭痛の種どころか、単なる邪魔者でしかないだろうことは、容易に想像できるものであった。

第2話：心内

- 第64管理世界、とある湾岸の寂れた倉庫内。

「…へい、確かに承りやした」

「ああ、すぐに船へと運んでおいてくれ」

「了解でさあ、デュアリスの坊ちゃんにはいつも世話んなってるからね」

薄暗い倉庫内に物影が二つ。片方は銀髪の男、ラフェスト。

もう片方は、見るからにガラの悪そうな中年の男であった。

中年の背後には巨大なコンテナと、それを動かす機材が置いてあった。

「貴様は実に能率のいい買い口だからな、俺も重宝している」

「そいつはお互い様でさあ、管理局の連中がデカい顔するようになってから」

こつちも商売あがったりですからねえ、坊ちゃんみたいな大口の客は俺にとっても貴重なんで」

普段の鋭い眼光を、少しも緩めることなく淡々と喋るラフェストに
対し

中年は、気前の良さそうな営業スマイルを浮かべてそれに答える。

ここ、第64管理世界はラフェストの出身世界である。

数年前の戦争が終決して以来、比較的治安は良くなってきた。
が、それは表向きでしかなく、実際は富裕層と、市民の格差が広がる一方で

それに抵抗する反乱分子の処理と、事件を揉み消す国の情報統制に

よって

仮初の平和が、築かれているにすぎなかったのである。

この世界に設置されている管理局の地上支部も

国家との金銭のやり取りによって腐敗しきっていた。

ラフェストが今日、この場を訪れているのは、必要物資の補給の為だ。

昨日のエステイからの任務の報酬として、あのチンピラ達から奪った資金の内数割が

ラフェスト個人の費用として当てられたのだ。

彼はその資金を用いて、姉の代から世話になっている闇商人から

レジスタンス残党に当てる食糧やら軍需物資やらを買っていたのだ。

レジスタンスは小規模ではあるが、国家の目の届かない場所で力を蓄えている。

いずれ再び決起し、国を自分達の手に取り返すために。

…が、その場にいたのはラフェストと中年だけではなかった。

「ほわあゝすっごい大きいねゝ！これ全部ラフェストにいいちゃんが買うの？」

ラフェストのすぐ横に、興味津々といった風な表情で、クラムがコンテナを見上げていた。

黄緑色のワンピースを纏った金髪の少女がこのような場所にいるのは不釣り合いとか、そんな次元のレベルをとくに超えている。

「黙っている…ガキ…」

そんなクラムに対し、ラフェストは額に手を当てて、あからさまに不機嫌そうな表情になる。

だが、当のクラム本人は辺りをキョロキョロするばかりだ。

「…坊ちゃん、さっきから気になってやしたが、誰なんですかいその子は」

「協力者のトコにいるガキだ…暇そうにしてるからと言われて押し付けられただけだ」

「ああエステさんとこの…あの人も大概変わってますよねえ…」

中年の問いに、うんざりしたような口調でラフェストは答える。

それを聞いて中年は、納得したとでも言いたげな顔で、ラフェストに同情的な視線を向ける。

実際、エステの下にいる5人の中で、クラムは特に自分の目的を持っていない。

エステの任務以外では、こうして他の4人に付いていくことが多い。

今日ラフェストに同行しているのも、同様の理由であった。

当然、無駄が嫌いなラフェストは最初、突き放したが。

クラムが駄々をこねてしまったので、エステに押し付けられたのである。

ラフェストからしてみれば、不愉快この上ない話であった。

物資の搬入も終え、2人はエステイから借りていた小型の次元航行船で、ミッドチルダへと向かう。

「あー楽しかった！にいちちゃんの世界って面白いしね！」

「俺は楽しくも面白くもなかったがな」

「ほえ？どーして？」

「…10割がお前の所為だバカが」

帰りの船内で、2人はこんなやり取りをする。

空気を全く読まずに、お構いなしにはしゃぎ回るクラムはラフェストには、本当に邪魔でしかなかった。

クラムが協力者でなければ、すぐにでも額を撃ち抜いていただろう。

「…クラム、一応聞いておけ」

そして、笑顔で足をバタバタさせているクラムに対し

ラフェストは船を操縦しながら、冷たい口調で語り始める。

「俺が貴様らと組んでいるのは、俺自身の復讐を果たす為に必要だからではない」

俺は、あの世界から管理局と国家を潰す為なら、誰であろうと何であらうと利用する

それは貴様も、他の連中も、そしてあの女も同じでしかない…
あまり余計な邪魔をしていると…消す」

ラフェストにとっての紛れもない本音である。

基本的に人とつるむのを苦手としており、無駄を非常に嫌う主義なラフェストである。

エステイと組んでいるのも、彼個人と、弱体化したレジスタンスの力では到底賄えないだけの価値ある情報、資金、物資が安全かつ大量に手に入るからである。

なので、多少の面倒にも目を瞑っているのである。

彼からしてみれば他の4人など、自分とは特に関係のないお荷物程度でしかないのだ。

現に、エステイの指示以外で、彼が他の4人と絡むことは殆ど無かった。

「……………ん？」

ぼけーとした表情で、クラムはラフェストを見つめていたが、しばらくした後に、ニコッと笑ってこんな事を言った。

「うん、つまりにいちゃんはこれからあだし達の仲間になってくれるんだよね！」

「……………貴様、俺の話を聞いていたのか？」

子供相手にムキになるのも、バカバカしいとは思っていたが流石のラフェストも、この返答には呆れてしまう。

自分はお前らを利用してただけ、その言葉に対する答えがそれなのだ。

いくら理解力の乏しい子供とはいえ、どうかと思ってしまう。

だが、クラムは目を瞑り、懐かしむような口調で話し始める。

「だって、あたしを自由にしてくれたのはラフェストにいちやんだもん

だからあたしは、にいちゃんのが大好きなの

うっん、にいちちゃんだけじゃない、タツマやオスカーのにいちちゃん
パレットねえちゃんにエステいおばさん…みんなみんな、あたしは
大好きだもん

難しいのはよくわかんないけど…ラフェストにいちちゃんはまだみんなと
一緒にいてくれる

あたしはみんな一緒にいて、みんなと遊べるのがいつちばん幸せな
んだ

だからあたしはそれでいいの、エリーもそれが幸せだって、言っ
てくれたし」

「……………」

昨日の様に、エリーを使って平気で人を殺すようなこともしてはい
るが

クラムは未だ8歳という、幼い子供である。

なので、年相応の知識しかない彼女は、小難しい理由や目的を特に
考えてはいない。

彼女にとっては、仲間と一緒にいるのが楽しいから、それだけの理
由でエステの下にいるのだ。

明確な目的がある他の4人からすれば、ある種異質ともいえる。

そんなクラムの答えを、ラフェストは黙って聞いていたが

「…チツ…本当に面倒なガキだ…」

やがて、クラムに聞こえないように、ボソリとこう呟いた。

ミッド南部アルトセイム地方、市街地にあるショッピングモールにて

「…よし、そのまま来い来い来い…落ちるなよ…」

その一区画にあるゲームセンター、そこでクレインゲームとにらめっこしている男が一人。

黒いキャップにサングラス、青と白のパーカーに紺色のジーンズ。そんな出で立ちのタツマであった。

景品を掴んだアームの前で、目を大きく開いて固まっている様子はどこにでもいる普通の青年、といっても差支えがなかった。

「来い来い来い…ぐああ！！またかよー！」

運命とは非常なもので、アームに掴まれた景品は

タツマの下に届く前に、力なくポトリと落ちてしまう。

その瞬間、タツマはクレインゲームの前で頭を抱えて頂垂れてしまう。

「くっそー…水没戦士ステイシスのレア物人形が…」

「いや、どんなアニメなのよそれ…」

呆れた口調で、悔しがるタツマに声をかけるのはパレットである。

暖かそうなピンクの毛糸のセーターに、チェック柄のスカート

黒のニーソックスに白いニット帽、そしてタツマと同じサングラスを身に着けている。

これまた、サングラスを除けば都会に普通にいそうな女性に見える。

「知らねえのか？水没戦士ステイシスは、今超大人気のロボットア

二めで

ピンチになると真の力を解放して、埋没戦士アンサンングにも変身する…」

「聞いてないわよ」

目を爛々と輝かせて語るタツマの話を、パレットは白けきった表情で右から左へ流す。

そもそも、パレットはここに遊び目的で来たわけではないのだ。

「ほら、買い物も終わってるんだし、早くエステさんの所に戻るわよ

でないと食料品が腐っちゃうわ」

「ええ〜？ いいだろ少しくらい、あとワンチャンス…」

「…はあ」

子供みたいに駄々を捏ねるタツマの姿を見て、パレットは若干の頭痛を感じ始める。

仮にも自分と同じ裏の人間であるというのに、このポジティブさは何だというのだ。

このような反応を見る度に、タツマに対してそんなことを思っってしまう。

だが、彼の我儘はともかく、目的である日用品の買い出しはとうに済んでいる。

ここに長居する理由はない、そういうわけで。

「…いいから、とつとと行くわよ」

「ちょ…イデデデデ！！ひ、引っ張るなって！！」

タツマのパーカーの襟元を掴み、彼を無理やり引っ張っていく。タツマは首を押さえて苦しそうにしていたが、パレットはお構いな

しであつた。

「ちえゝ…あの台限定のレア物だったのにさ」

「それ一つにお金をつぎ込みすぎなのよあなたは…」

帰りの車の中、残念そうに話すタツマに呆れた口調で返すパレット。普段は裏の仕事をしていたとはいえ、エスティ達の下にいる5人は任務がなければ、こうして普通に街に買い物に来ていたりもする。が、やはり裏の人間である以上、馴染みすぎるのは良くないわけであり。

ところが、メンバーの一人であるタツマには、そのような自覚が殆ど見られない。

街に出る度に、ああやってゲーセンで何時間も遊んだりしている。ましてやタツマは元管理局員、目をつけられる可能性は他のメンバーよりも高い。

だから、今日みたいに普通に遊んでいられるような神経をパレットはいまいち理解できないでいた。

「ときどき思うわ…あなたがなんでパレットさんの所にいるのか…」

ため息交じりにパレットは呟く。

どう考えても、タツマのような人間が自分達と共にいるのが不自然に思えてしまうのだ。

「ん？そりやあまあ…あの人が教えてくれたんだしな」
「え？」

車を運転しながら話すタツマ、キョトンとするパレットにはお構いなしに

続けて自分のことを語り始める。

「俺だってちよつと前まではかなり荒れてたんだぜ？それこそラフ
エストみたいになさ

家族の敵に復讐したい、けどそれが出来ない、そんな感じで毎日怒
り狂ってた

けど、そんな中であの人に会って言われたんだ

『復讐ばつかに囚われて、今ある楽しい事を捨てたら損』だってな」

「今ある楽しいことを…？」

「そうさ、当然俺は復讐をあきらめたわけじゃねーぜ

けどあの人の言うように、そればつかで生きてても疲れるだけだし
な。

だからさ、俺は色んなことを楽しみながら生きていたいんだよ
表も裏も、どっちの世界も何事も楽しめるようにさ」

彼にしては珍しく、至極真面目な内容の話であった。

家族を殺されて以来、タツマにとっては敵への復讐が全てであった。
復讐を果たすまでは、他の些細なことなどどうでもいい、そういう
考えだった。

が、それが変わったのがエスティとの出会いである。

彼女の言葉を最初からすんなり受け入れたわけではなかったが、
それでも、彼女と共にいることでタツマは変わった。

復讐を果たすことに加え、人生を楽しく過ごすというのがタツマの
目的になっていた。

それは彼の中の明確な意思である。

裏の仕事でも区別なく、その感情を持ち込む姿は、周りには滑稽に見えるかもしれないが

タツマにとっては、至って本気な自分の生き方だったのである。

「お前はさ、どうなんだよパレット？」

「え、私…？」

一所話し終えたところで、今度はタツマの方が尋ねてくる。

パレットは少しの間、考え込むような素振りを見せていたが、やがて静かに語り始める。

「私は…正直に言うときよくわかってないかもしれない…」

あの日、あなたとオスカーにたまたま会って、成り行きでエスティさんの下に来て…

もちろん、あの人には私も感謝してるわ、あの人のおかげで更に強くなれたんだし…

けど…今のこの生活にあまり馴染めてない私がいるのも事実…

あの子に会うために、私の戦いを一刻も早く終わらせる…

そんな風に考えると、のんびりしてていいのになって…」

パレットにとっては、エスティと他の4人との生活は決して悪いものではなかった。

各々が違う目的で動いているとはいえ、本来は後ろ盾もなく

一人の戦いをする筈だった彼女にとって、またとない拠点を得たからだ。

それに彼女自身、それぞれ個性の強い仲間達との生活を、それなりに楽しんでいる。

が、パレット自身の最終目標は、あくまである人物との再会その為に自分で決めた、自分の中の敵を全員始末することである。

目的を果たす為とはいえ、普通の一般人と変わらぬような
このような平和な日々を受け入れている暇などあるのか。
そんな風に考えてしまうのである。

「やれやれ…お堅いんだねえお前も…」

パレットの心情を聞いて、タツマはちょっと不機嫌そうな表情にな
りながらも

「ほら」

「え…つとと」

車のケースから保管していた駄菓子をとり出し、それをパレットの
方へと投げてやる。

「まあ他人の生き方にどーのこーの言う趣味はねーさ。

けどさ、もうちょい軽く考えんのも一つの手だと思うぜ？

目的ばつかで、ラフェストみたいないい好きかないキザになっちゃう
のも

それはそれでほら…えーと…なんか嫌じゃん？」

言葉が思いつかなかったのか、タツマは笑顔を浮かべて誤魔化して
いた。

「……うん……」

が、パレットはタツマの言葉を聞いて、少し胸が軽くなった感じが
していた。

タツマから渡された駄菓子を見つめながら、小さく頷くのであった。

＊

エステイの屋敷、地下に建造された研究室の一つにて。

「シュート」

その中にいたのは、バリアジャケットを展開したオスカー。彼は右腕のプロトナックルを振り上げ、形成した魔力弾を目の前にいる目標物へとぶつけていた。

放たれた魔力弾は、目標物である単眼の丸いメカに当たる直前、鈍い音と共に急激に減速、その威力を大幅に落としてメカに当たる。故に、メカを破壊するには至らず、ボディは全くの無傷であった。

『うーむ…殺傷設定込みとはいえ完全消滅には至らないか…結合分解のスピードをもう少し早める必要があるな』

その様子を別室でモニターしているのがエステイである。

エステイは5人への任務で得た、様々な資材を基に

屋敷の地下の研究所で、独自の新技術の研究を行っていた。

そして今回の検証に、手が空いていたオスカーに付き合ってもらっていたのである。

『ご苦労さん、もうあがっておいてくれ』
「はい」

満足いくデータが得られなかったとはいえ、これ以上はやるだけ無駄と考える

エステイはモニター越しにオスカーに向かって、実験終了の旨を伝える。

オスカーはそれを聞いて機械的に返答し、バリアジャケットを解除した。

オスカーは屋敷内の自室に戻り、備え付けのベットの裾へと腰を下ろす。

そして無表情のまま、自分の右腕をじっと見つめる。

（止められた、か。兵器としては不合格な結果だな）

結果に納得していなかったのは、オスカーの方も同様であった。

力をセーブしていたとはいえ、あの魔力弾は敵を破壊するつもりで放ったものだ。

それが、敵に対して傷一つつけられなかったとくれば、彼にとっては大きな不満である。

自分の存在意義が『兵器』であるなら、欠陥品もいいところそんな風に考えていた。

（僕以外の機人、か）

オスカーは続けて、じっと動かないまま数日前のことを思い返す。

●

「…というわけで、これが機動六課の構成員だ」

自身の背後にある大モニターを前にして、エステイは説明を終える。新設部隊の六課についての情報を、エステイは他の5人に伝えていた。

「いやあまあ…エステイの言うようにこれまたとんでもな部隊だよねえ…」

端から見れば何この無理ゲ？みたいな感じじゃん？」

「そうは言っなタツマ、アンタの復讐相手だってそこにいるだろうが」

「いやいやそうは言うけどなエステイ？それだけならまだしも他に余計なのが多すぎるんだって、復讐すんのに俺が死んだら意味ないし」

その構成員の無茶苦茶ぶりには、流石のタツマも呆れていたようである。

エステイとこのようなやり取りをするも

自身の復讐相手以外に、余計な障害が多すぎると考えているようであった。

「何を言ってやがるチキン野郎が…敵は所詮殺す覚悟も無い小娘どもだ

会敵の可能性があるなら、こっちに気づかれる前に、殺つてしまえばいいだろう？」

「ラフェスト…そうは言うがな、あまり甘く見るんじゃないよ？」

新人連中とはかく、隊長陣はアンタらがサシでやつたらかなりキツイ

タツマはともかく、アンタはそう無理に相手する意味はないだろう？」

酷く物騒なことを言つてのけるラフェストを、冷静な口調でエステイは制す。

裏世界の住人である彼らは、当然のごとくデバイスの非殺傷設定を解除している。

対して、管理局の魔導師は、余程の例外があるか、馬鹿でもない限りそれを解除することは許されていない。

その姿勢は、ラフェストからしてみれば反吐が出るほど甘く見えていた。

自分の世界にいた管理局員でさえ、戦争末期には殺傷設定で魔法を使っていた。

故に、機動六課は彼の目には力を持ちながらわざわざ手を抜く甘ちゃん集団にしか映っていなかったのだ。

が、エステイの懸念事項は、そもその実力の差であった。

殺す殺さないの覚悟以前に、六課隊長陣は全員AAAランク越えの化け物だ。

普段はリミッターがかかっているという情報があるとはいえ、ランクに裏付けされたその力は、非殺傷といえども侮れない。

自分の下にいる5人も優秀な魔導師たちとはいえ

六課隊長陣と比べれば、流石に見劣りする。

六課と特に因縁があるわけでもないラフェストが隊長陣との戦闘という、危険なリスクを負う必要は無いと考えていたのだ。

「…よりにもよって、か…」

そんなラフェストを余所に、パレットがモニターを見ながらポツリと呟く。

その表情は酷く暗く、視線は六課のメンバーのある一人へと向けられていた。

「…まあ、ミッドで仕事してる内に鉢合わせる可能性もあるさねけど心配すんな、もし六課が出てくる可能性がある時にはアンタは無理に出さないようにしてやるからさ」

「…はい、ありがとうございますエスティさん」

エスティの言葉に、暗い表情のままパレットが礼を述べる。

パレットの目的を知っている上で、エスティはこのような提案をしていた。

「……………」

そしてもう一人、オスカーもまた、六課のメンバーの一人を凝視していた。

「ああアンタもか…アンタは寧ろ積極的に出してやった方がいいかね？」

なんせ、アンタにとっても初めての『同類』なんだしねえ」

「……………」

エステイの言葉には全く反応せず、オスカーはモニターを凝視し続けていた。

●

（戦闘機人、タイプ・ゼロセカンド、か）

右腕をじつと見つめたまま、オスカーは六課のあるメンバーのことを思い浮かべる。

エステイの情報が確かなら、彼女は紛れもない、自分の同類である。その同類達との接触、それがオスカーの目的の第一歩であった。

（…多くの同類と会い、戦い、そしてその実力、生き方を見るそれが、僕の存在意義、それを見出す切っ掛けとなる）

ベッドから立ち上がり、前を見据えてオスカーは心内で呟く。エステイの手引きで助け出され、彼女の下で戦ってはいるが、彼は未だ、自分の存在理由というものを見出せずにいた。

自分は戦闘機人、兵器として生きる以外に術はない、そう思っているが

それが本当に真なのか、悩む自分も存在していた。

故に彼は比較対象を求めている、自分と同じ戦闘機人。

自分の同類と会い、力や考えを見、自分が戦闘機人としてどう在るべきか

それを見つげるための糧とし、やがては自分の真の存在意義を見つ
け出す。
それが、彼の目的であった。

第2話：心内（後書き）

次回からようやく、なのはキャラを出せそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8137y/>

ありがちな設定のありがちな話 ～リリカルなのはStrikerS～

2011年11月26日22時01分発行